



あなたは仏さまに 成りたいですか

念仏成仏これ真宗
万行諸善これ仮門
権実真仮をわかずして
自然の浄土をえぞしらぬ
(親鸞聖人・浄土和讃)

お聴聞下さっている方々にお説教の中では答えを求めるとはしないようにしていますが、談話の席では「仏教はどんな教えだと思いますか」とお尋ねしてみることがあります。

皆さまからは、重ねてきたお聴聞のお説教を思い起しながらいろいろな答えが出ます。まったく間違っているたことを言う方はおられません、**「簡潔に言えば仏に成る教えですよ、だから仏教というのですよ」と申し上げると、素直に頷かれます。**

では、「あなたは仏さんに成りたいですか」と尋ねられたらどうでしょう。

これには正解があるのではありません。「あなた自身は？」という問いかけです。

* * *

3年ほど前になりますが、真宗教団連合東京支部10周年記念大会が築地本願寺であり、真宗大谷派（お東）の小川一乗師が

「あなたは仏さまに成りたいですか」という副題の付いた記念講演をして下さいました。

その中で、「僧侶を対象とした研修会などで、この質問をしてもまずビックリされ、歎異抄や親鸞を素晴らしいと讃嘆し、著書にしたり発言している宗教学者や作家にお尋ねしても、そんなことは当たり前だろう、という答えもあまり返ってこず、戸惑う方が多いのです。

仏道に立たずに、仏道を讃嘆している。そんな変な現象が起こっていると痛切に感じています」と話されておりました。

* * *

私が、この私のままで仏に成ると約束された「念仏往生」は、親鸞聖人が最も大切にされたお言葉であり、真宗（浄土真宗）の教えの真髄です。

仏教には自力、他力の教えがありますが、いずれであっても「仏に成る」ということを目的としている教えです。

しかしこの言葉が、いのち終えた後の別な世界に生まれ変わっていくこと、そこに往生していくのが仏に成ることであるという、「成仏」イコール「死後」という響きになって、仏に成ることがわからなくなり、「浄土」の意味をも軽くさせてしまっているのです。

私たちのいのちは、「弥陀の誓願」に包まれたいのちです。

それは、「すべてをわれなく救い、お浄土に生まれ、仏にならなければ、自らも仏にはならない」とまで誓われた阿弥陀如来の願い（本願）とともにあるいのちなのです。

それを親鸞聖人は不思議だと味わいよるこばれました。仏の教えに出会いながら、それに背いて生きている私たちが、仏に成ることなどできるはずがありません。それなのに阿弥陀仏のご本願は「仏に成ることができのですよ」と教えている。

親鸞聖人はそれを不思議だと表現して、お念仏の仲間に語られました。

お念仏は、おまじないではありません。顕かにされた、いのちの真実に出会いながら、それに背き裏切りのような生き方しかできない私たちに、「そうではないぞ、そうではないぞ」と阿弥陀如来が呼びかけて下さっているご本願が「南無阿弥陀仏」です。

「仏さまに成りたい」と願って歩む道が仏道です。親鸞聖人は、知識ではなく、信心を旨として自らの生涯を貫き生きて、私たちに示して下さいました。

お念仏のみ教えに力強く生きられた親鸞聖人のみ跡を慕いつつ「念仏成仏」を約束されたいのちを歩み生き抜くこと、それが浄土真宗の仏道なのです。 合掌

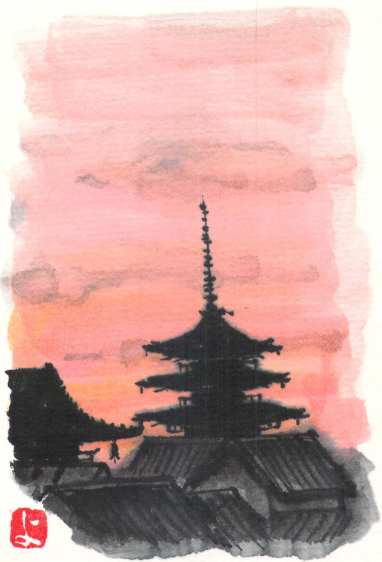
奏庵法座

日時
10月26日(水)
午前11時～

「真宗宗歌」
正信偈
住職法話
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

日照時間の少ない数ヶ月で野菜価格の高騰が言われていますが、そんなときこそ、順調なときには翻弄させられる格差(贅沢)ではなく、いろいろなことを乗り越えて培われた生きる力が生かされます。我々は「これがないからできな～い」などとは言いません。年齢や苦難は無駄には重ねていません。「あるものをありがたく」いただきながら生かされています。

どうぞ元気を出して、でも無理はせず、お参り下さい。



佐々木閑の
『日々是修行』より

【悟りに試験はない】

仏教の最終目標は「悟り」だが、それは言ってみれば、「生きることの最先端」である。それがどういう境地で、どうなったら悟ったことになるのか、まわりに判定してくれる人は誰もいない。

だから仏教には、「悟りの判定基準」などというものはない。悟った人だけが悟ったとわかるのである。曖昧な言葉に聞こえるかもしれないが、客観的な基準を決めてないところがよい。基準があると、とたんに「悟り」がただの試験問題になる。

人のためではない、自分のために歩んできた道の、最後の仕上げに他人の試験問題を受けて何になる。「納得のいく一生を送りたい」と思うなら、最後の試験官は自分自身に決まっている。自分が納得する以外に、合格などあり得ないのである。

聞法においてのみ
私たちは生涯を通して
成就への歩みを
続けることが
できるのである

(藤井敏哉)

3年続けてのノーベル賞受賞は、何かにつけ内向きで自信を失っている日本人を勇気づけてくれた。なぜそれが心から誇らしく思えるのか。それは勝った負けたでもなく、強い弱いでもないものであり、いずれの日本人受賞者も、奥ゆかしく、かといって謙りくだり過ぎてみず、明るく実直で、しかもユニークな日本人が成し遂げているからだろう。■それに比べて、騒がしさを増すオリンピックや豊洲の問題のどちらにも「気分の良くなる」人はいない。策を労じ、根回しをし味方を増やしたりして、いずれ強い方に決着はつくのだろうが、そこに「すっきり感」がないことだけは変わらないだろう。そして、既得権益にしがみつ়組織は浄化されず、「世間とは、大人の世界とは、こういうものだ」をより強く植え付け、経済損失以上の「負の遺産」になり、これからの世代を萎縮させる。■ノーベル賞受賞者が我々にもたらしてくれる爽快感は、それを可能にさせるのが、知能、経済力、環境などの他に、もう一つ「何か」が必要であって、その「何か」が日本人の誇りを蘇らせてくれるからだと思う。受賞者の「人と違うことを地道にやってきた」の言葉には、ノーベル賞が、人間だけが持つ文明が「余裕」につながってこそだということを感じさせる。■かつての東京五輪や大阪万博には、国威が誇らしいというより、見たことのなかったものを直に見る、接したことのなかった外国の人々に触れるという、未来へのワクワク感があって、日本人の殻を破らせるパワーがあった。しかしグローバル化した今、世界中のどれだけの人が、派手さで国威を誇示したものに感動するというのだろう。受賞しながら連絡を絶っているポブディラン、開催国誘致を降りた国々の方に、成熟した人間性を感じるの人は多いのではないだろうか。お偉い方々、時代錯誤ではありませんかかね……?! Norimaru